

①サツマハオリムシ②サツマハオリムシの棲管の上にいるタギリカクレエビ③鹿児島湾奥では火山性ガスが噴出しています④タギリカクレエビを採集するための網。隠れ場所としてスキの枝を入れ、たぎり周辺に沈めて採集します



かごしま水族館4階で展示しているタギリカクレエビは、約2〜3センチの小さなエビです。2001年、鹿児島大学の大富潤教授らの研究で新種であることが報告されました。鹿児島湾奥では海底から火山性ガスが出て、場所があり、水面に気泡となつて現れます。まるで海面が沸騰しているように見えることから鹿児島では「たぎり」と呼ばれ、和名の由来になっています。

タギリカクレエビが発見されたのは、このたぎり周辺の水深80〜100センチほどの場所に生息している、サツマハオリムシの群生地です。サツマハオリムシはゴカイの仲間で、

タギリカクレエビ 謎多き小さな生物

自らつくる硬い筒状の「棲管」の中で生活しています。海底に並ぶ棲管は森に生い茂る木々のよう。タギリカクレエビはその管の隙間に隠れるように生息していて、サツマハオリムシ群生地とその周辺以外の場所では発見されていません。

タギリカクレエビが、なぜサツマハオリムシと一緒にいるのか、実はいまだにわかっていません。サツマハオリムシがたぎり周辺に群生しているのは、発生する硫化水素を体内のバクテリアの力で栄養に変えるという明確な理由があります。

タギリカクレエビも硫化水素がある環境でしか生きられないのではと思つてしまいましたが、水族館の水槽に硫化水素はなく、サツマハオリムシもいません。単独でも問題なく長期飼育でき、アミや魚のすり身など普通の餌を食べます。この小さなエビには、まだ私たちが知らない秘密があるのかもしれない。（魚類展示係飼育員・中村政之）